

第11回評議員会 報告

日時：2024年2月10日（土）10：00～11：45

場所：東京国際フォーラム

出席者：藤井千春、長谷川真理子、竹本織太夫（以上評議員）、
清村百合子（代表理事）、鉄口真理子、宮澤多英子（以上常任理事）

2024年より新しい評議員の先生方に委嘱し、今回が初顔合わせの会となりました。

評議員会では、学会の運営体制はじめ、研究の方向性や日本の音楽教育が今後目指すべきものについて、外部委員の先生方から多様なご意見をいただくことを目的としています。

今回は「これからの日本の社会の変化と学校音楽教育の役割」を主なテーマとして、さまざまな観点から自由闊達にご議論いただきました。

まず「地域の音楽と学校教育の関係」について、文楽の竹本織太夫氏からは各地域に根差した音楽の存在に目を向ければ、各地域の演奏家や指導者が見つかる可能性が高く、その地域に縁のある音楽を子どもたちに教えることの重要性が述べられました。

また近年、学校現場では教科横断的な学びが注目されています。そこで「教科横断的な学習と音楽科の関係」について、教育哲学が専門で長年総合学習の研究に携わってきた藤井氏からは、STEAM教育についてSTEMだけならば新たな理数系の科目を創出するだけになってしまう。Aが入るからこそ、想像（イマジネーション）する楽しさを味わえることになるのではないか、また教師自身が「探究とは何か」を理解していないと実現しにくいという意見が出されました。

自然人類学が専門の長谷川氏からは「現実世界・リアリティーと学校教育」について、これからの世界ではバーチャルの世界に満足し、リアルなものに着目するという精神が失われ、AIに使われ、人間性を失う人たちが大半になっていく危険性が迫っているとしたうえで、学校教育は実際の生活と乖離してはいけないこと、またテクノロジーによってできることが増えていることは確かだが、教育者としてはテクノロジーの進化によって「何ができて」「何が失われるか」の区別ができなければならないという意見が出されました。

対面での開催は、皆さんの活発な議論を引き出し、発展的でエキサイティングな対話が繰り返し広げられ、あっという間の2時間でした。これからの音楽教育を考えるうえで、われわれにとって非常に具体的な筋道を示してくださったように思います。